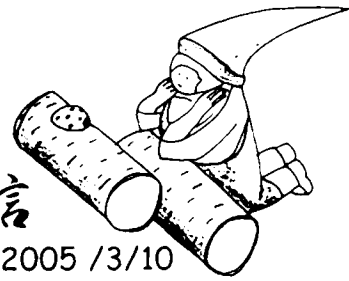




リサナメント * TAKARAZUKA 通信

NO.9 2005 /3/10



めぐってきてうれしいもの、春。そろそろ鶯の初音が聞こえてきそうなおだやかな陽気です。リサナメントの集まりも、皆さまに支えられて、5度目の春をむかえました。

2月13日、宝塚市内の介護施設を見学させていただきました。稲本さん、松藤さん、今井先生が各施設との橋渡しをしてくださり、老健施設・ステップハウス、特養施設・夢御殿山、グループホーム・こだま診療所それいゆ会という3種の異なったタイプを訪問、有意義な経験をしました。想像以上の歓待でお迎えくださったそれぞれの訪問先の皆様に感謝いたします。

世話人会代表の上阪法山さんに見学記を書いていたいただきましたので、それを見ながら振り返ってみましょう。



建物に入ると広いゆったりとしたエントランスの空間、バリアーをなくした移動空間、居室と共同スペースとを併せ持つサービスの場所、窓からの遠景に宝塚を感じられる建物や山々をのぞめる。壁にはボランティアが展示してくれた季節感ある写真、利用者の書かれた一言手紙。お風呂が大きな楽しみと感じられる檜風呂、ジャグジー気泡装置、車椅子で入浴できる装置。家族や知人が自由に訪れることができる開放的な施設。これらには人に喜びをプレゼントできるのを我が喜びと知る人のみの工夫が見える。

設備の高度さに、我が国の福祉もここまで進化したのかと目をみはりました。居心地のよい空間づくりへの職員の方たちの意気込みがひしひしと伝わってきました。反面、この整然としたものに、筆者は違和感も抱いたそうです。



いささかりゾートホテルのようで生活の泥臭さがない。今ここにおられる高齢の方は空襲や食糧難、つぎをあてて着続けた服など思い出は身にしみているだろう。そんな昔と今を繋ぐものは懐メロの歌謡曲だけなのか。人生の後半を過ぎると生産？に従事するものは少なく、ただ日々を過ごさざるを得ないのか。生活実感のある場、慣れ親しんだ場から離れていざるを得ないのか。多彩な年齢世代の人と出会う機会を少なくしてしまうのか。よい施設とは、「外の空気が入る窓」をしっかりと持った、換気の良い施設ではないだろうか。

とても重要な問題提起だと思います。入居者の方たちは、単に生きているのではないということ、だからこそ、生活する・暮らすということを大切に考えてあげる視点を忘れてはいけないのだと、気づかされました。介護・福祉の専門家の方たちが高い意識を持って努力しておられても、解決にはさらなる試行錯誤が必要なのでしょう。



◎見えたもの◎人生を歩んでこられた深い顔。人との出会いを楽しまれていること。趣味や興味を持ち続けて楽しむ。時間を人に決めてもらい生活する気楽さとしんどさ。入居者各人を守る管理機能。筋力強化や趣味の展開のための機材が豊富に用意されていること。

◎見えないもの◎昼夜の違いによる行動や気持ちの揺れ動き。季節を手足で感じながら生活すること。自ら他人に手を貸し、関わりをもつ機会はあるのか。休日に出かける先のない寂しさをどう昇華するのか。機能訓練で得た運動能力を何に使っていきたいと思われるのか。

大きくまとめていえば、充実してきているハード面に、ソフト面からのサポート体制がどう追いつくべきか、ということでしょうか。今はまだ外側にいる私たちが何をすればよいのか、親身になって考えるきっかけをいただいたように思いました。参加された方の眼に耳に心に飛び込んできた内容を世話人にお伝えくださり、意見交換ができますことを願っています。

リサナメント宝塚世話人会

